

A c a n t h u s

第10号

平成21年2月17日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会



土浦中学校第1回卒業生(明治35年3月) ↑

今年の卒業式は、3月2日、全日制は61回目、定時制は58回目です。茨城県土浦中学校の第1回卒業式から数えると108回目です。左の写真は第1回卒業生の記念写真です。和服に制帽という出で立ちに時代を感じますね。写真もさることながら、奇跡的に残されていた第1回卒業証書授与式に関する詳細な記録があり、それによって当時の卒業式の様子がわかりました。卒業証書の番号は、中学校第1回の1番から通し番号になっています。今年卒業する貴方の証書番号は何番になるでしょう。そう考えると感慨深いものが去来しますね

第1回卒業証書授与式記録 ↓

第一回卒業証書授与式

新装立田校舎で盛大に挙行

右の「第一回卒業証書授与式記録」を原文のままではないが、その一部を記してみよう。

五星霜決して長くはない。然し螢雪の苦学の五星霜十星霜にも当たる。此の長日月の間、寒暑を物の数ともせず勇ましくも業なし終へし我々の健児、三月二十八日を以て証書授与式を挙行せられんとす。連日の雨も全く上がり、満空拭へるが如く晴れて、天も亦是に祝意を表してくれている。玄関前に大緑門を立て之に卒業式の額を掲げ旭旗を交叉し立てた。正面には御勅語を掲げ旭旗を交叉し紫幕を張り花瓶に桃柳を挿し美々しく装飾してある。式は以下の順序で進められた。

生徒は運動場に整列し知事を歓迎。

《卒業式の開始》第一鐘を以て講堂に一同着席す。第二鐘にて職員及び来賓併に父兄着席す。第三鐘 囃楽奏楽の内、校長が先導して河野知事が臨席すると、一同敬礼。

《証書授与》君が代の奏楽の後、福山校長、卒業生三十二名に一々卒業証書を授与。四・三・二・一の各生には総代に学年修業証書授与。一学年間品行方正學術優等者には褒状を総代に授与。

《祝詞》学校長 福山校長雄弁を振るい祝詞を述べ、次に卒業生の如何は学校の



名譽運命に関する。殊に第一回の卒業生は世人より大いに注目せらるるものなれば決して軽忽の行為ある可からず云々と訓戒あり。

職員総代 村田教諭真情溢るるばかりの祝詞を朗読。水海道分校岡野教諭より卒業式を祝すとの祝電ありたりと告ぐ。

《来賓祝詞》河野知事が登壇祝詞を朗読。(以下、県会議員・新聞記者・水戸中学校長などから祝詞が述べられ、次に父兄総代藤田重文氏祝詞を朗読せらる。

《答辞》生徒総代、中山庄一郎の答辞朗読。《式終了》整肅の内、式主く終り、奏楽演奏。

《来賓退場》知事に続いて以下退場。以上が記録に示された式の概要であるが、機関誌「進修」第4号(明治35年9月刊)にも第1回卒業式について次のような記載がある。『花笑ひ鳥歌ふ春、霞ヶ浦邊に現出して、分校となり、本校となりし、我茨城県立土浦中学校は、其建立より五年の星霜を閲して、(中略)待ちに待ちたる第一回卒業式を挙行しぬ。(中略)あはれ今日、年来睦びに睦びし、校舎、教師、校友に袖を別つかと思ひば、落涙止むべからず、(中略)螢雪多年の功力著れし、卒業生諸君いかに愉快なるぞや……』

なお式に列席した来賓は県知事をはじめ、視学官・県会議員・税務署長・警察署

卒業生退学者調 (概算)

入学年	入学者数	卒業者数	中途退学者数	転学者数
三十七年	一〇五	四〇	六五	六・九
三十八年	一三〇	五一	七九	六・八
三十九年	一一〇	五九	八一	六・七・五
四十年	一三五	四六	八九	六・五・九

退学者原因
一、成績不良
一、転学

長・土浦監獄支署長・小学校長・町長など地元名士三十数名、その数卒業生を上回るものであった。

入学者の六割は中途退学

左上の資料は、明治30年代後半の中途退学者状況調である。明治35年の卒業生は入学当初80名の四割にすぎなかったが、その後もこの傾向は変わらず、中途退学者は入学者の六割を超える状態が続いた。真鍋台校舎が完成して間もない明治39年の入学者は120名であったが、卒業したのは僅かに39名であった。

中途退学は落伍か？

中途退学の原因は資料にもあるように家事都合、成績不良、転学が挙げられている。それぞれの員数は示されていないが、転学はそれほど多くなかったと思われる。旧本館に保存されている明治36年度の「学年試業成績表」に全生徒の考査成績が成績順に記載され、合格点に達しなかった者は総数で76名に達し、落第となつている。こうした落第者は原級に留まるか、退学するかを余儀なくされた。学業の厳しさに耐えきれず、学舎を去る者が少なからずあった筈である。

卒業式では、卒業証書授与の他に学年修業証書授与も行われた。土浦中学校で「1年間修業した」「3年間修業した」という重みのある証書が各学年修了者に手渡されたのである。当時、中学校に進学する者は極めて少数の限られた子弟であった。中学校に入学し、何年か勉学するだけで、それなりの社会的意味を有した。入学が卒業と直結するものとは、必ずしも考えていなかった当時の社会通念があった。こうした時代背景を考えると家事都合という理由で退学した者がかなりの数にのぼつたのではないだろうか。中途退学がそのまま挫折とは限らなかった。土浦中学校で何年間か学業に精進したこと自体が高く評価されたのである。